

露地メロンの栽培の要点と

ホルモン処理による着果促進 (1)

山梨県農業試験場 野菜科 高山 覚

はじめに

わが国の露地メロンは大正末期から、夏期乾燥する北海道、東北地方に栽培されていたが、近年のように「露地メロン」という言葉が一般的になったのは、ごく最近のことである。現在は露地メロンとして市販されている品種の数は多い。しかし、実際に市場出荷用として作付けされている品種は少ない。

露地メロンの栽培が全国的に広がり、しかも多くの品種の中で、ごく少数の品種が実際に使われているにすぎない。この理由を考えてみると、露地メロンというのは、高価な温室メロンとは反対に、一般の人が食べるために買うことのできる単価で供給できる、ということである。そして、全国的に使われている品種をみると、——これからの品種についてもいえることであろうが——まず食べてうまい、作る方からみると、どの果実も当たりはずれのないこと、次に作りやすいこと。すなわちわが国は四季の変化が激しく、しかも雨が多い。このようなところでは、露地で作る場合は適温の幅が狭いので、開花から収穫まで2ヵ月に近い期間を必要とする晩生のものは作りにくい。また病気の発生も多いので、長期間にわたって旺盛な草勢を保つこともむずかしい。多雨、多湿なところでも草勢が強くと、病害の少ないものということになる。

この二つを最低の基本条件として、さらにその上品質、外觀などがよくなれば、さらに消費は伸びるものであろう。

作 型

このようなことで、できるだけ安いコストで作りに、より多くの人に食べてもらえるようにするのが、露地メロンの大きな狙いであると思う。もちろん現在の施設、資材を使えば、各地で周年栽培はできるしかし、施設を使ってより集約的に栽培するとなれば、現在使われている

品種をわざわざ使わなくても、温室用に育種されたものを使えばよい。またこの種の作型ではコストも相当高くなる。

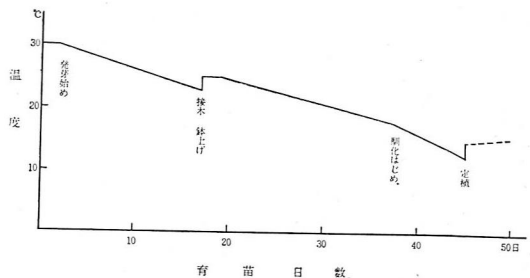
果実に十分糖度をのせるためには、成熟期の最低気温が20℃あたりまでがよく、それ以上になると、糖度の上りも悪くなるようである。そうすると真夏の栽培のできる地帯は限られてくるし、露地へ定植してゆくような作型では、果実の成熟期には最低気温が高くなって、糖度の低いものになるが、あるいは成熟期が梅雨期にあたり、多湿、病害の発生などで、栽培が非常に不安定になってしまう。このような関係で、適温期間をできるだけ伸ばし、より糖度の高いものを収穫するためには、夏季雨量が少なく、比較的低温な地帯を除いては、トンネル栽培が最も生産が安定する。

露地メロンが近年特に伸びてきた一因は、ビニールが普及し、トンネルなどの保温栽培によって適温期間が延

第1表 播種期と成熟日数糖度 (豊岡ら)

播種期	平均成熟日数	果 重	果肉の厚さ	糖 度	果形
2月20日	53	560-975	2.2-2.7	11.5-13.0	球形
3月1日	52	750-975	2.3-3.2	11.6-14.0	長球
3月10日	49	975-1,310	3.0-3.4	10.9-12.3	長球
3月24日	50	840-1,190	2.7-3.2	8.0-11.0	楕円
4月10日	40	825-1,500	1.8-3.0	6.6-9.9	長楕円

品種：ハネディユー



第11図 育苗の温度管理のめやす



接木



無接木

第2図 接木と無接木による生育のちがい

長され、品質の向上と生産の安定がおし進められたことによるものと思われる。

露地メロンはトンネル栽培が主な作型であるので、以下その作型を中心として述べることにする。

育苗

育苗日数は普通45日内外である。発芽床の温度は30℃くらいとし、発芽後は徐々に温度を下げる。移植のときは親床より移植床の方を、2~3℃高めにしておくとう活着がはやい。

播種

品種により種子の大きいもの、小さいものなどいろいろある。発芽までの日数は床温が30℃近くあれば、播種後2日くらいで発芽始めとなる。

接木をする場合も、接木まで播種床におく。期間は長くないので種子の間隔は1.5cmで、5~7cmの条播とする。発芽後僅かの期間でも葉が接触したり重なったりしないためには、播くとき種子の方向を揃えておくとよい。

接木

トンネル栽培では、定植当時は地温はまだ十分でない。もちろん畦にマルチはするが、根に低温伸長性をつけ、露地メロンの致命的な病害であるツルワレ病を防ぎ、草勢をよくし、濃度(生理)障害などを少なくするなどの目的で接木を行なう。

台木の品種

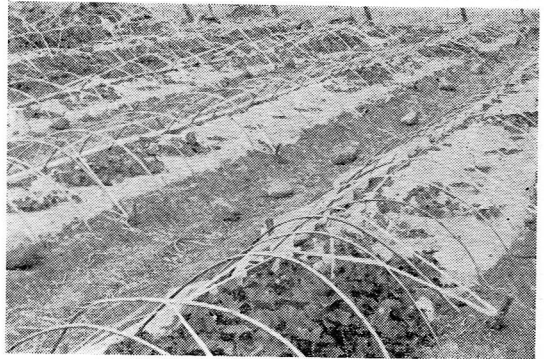
接木の台木は親和性の強いものを使わないと、接木の効果がでないだけでなく、接木してかえって苗の生育が悪くなったり、定植後株が枯れてしまったりすることがある。

台木用の品種としては鉄かぶと、新土佐、平和親善の

ような洋種と日本種のカボチャの一代雑種がよい。プリンスメロンのように発売元で、この品種にあうカボチャの台木用品種(新土佐一号)を、あわせて発売しているようなところもある。

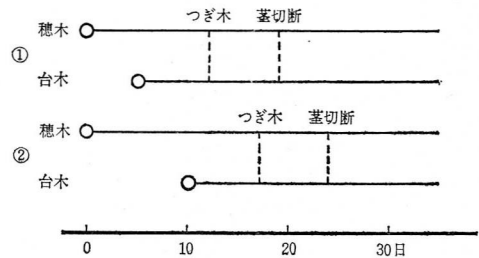
接木のやり方

最も多く行なわれているのは「呼びつぎ」である。この方法は、接ぐとき接穂のメロンの根を切ってしまうので、接木後の管理が割り接ぎ、挿し接ぎなどに比べ



第3図 接木不親和

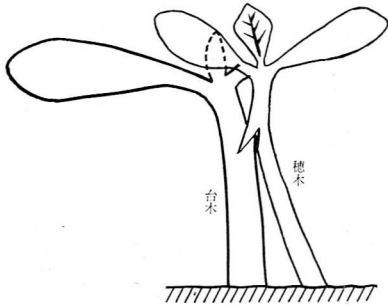
写真中央の生育のよい株は親和性の台木へ接がれたもの、他の部分は親和性の少ない台木へ接いだため定植後枯た。



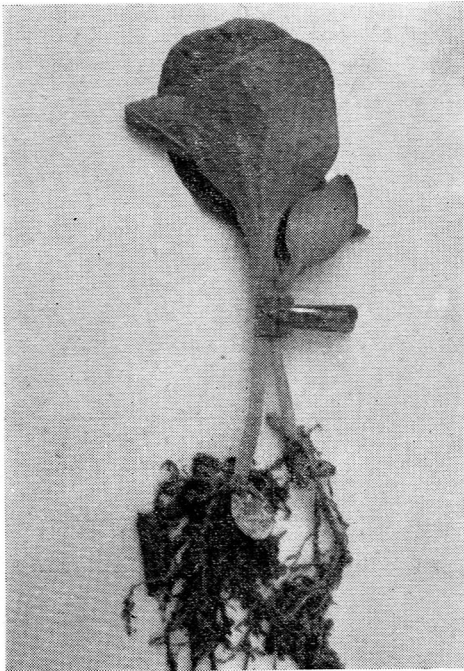
第4図 穂木と台木の播種とメロンの茎を切る時期

てらくである。呼び接ぎの要点は、接ぐとき穂木と台木の茎の太さを、できるだけ同じ太さになるようにしておくことである。このため、種子が小粒で茎の細いマクワ型の品種では、台木より1週間以上早く播く。

接木時は台木、穂木はできるだけ根を切らないように抜き取り、台木の芽を掻き取ってから、子葉のついている所から0.5~1 cm くらい下のところ、上から下へ斜めに茎の中央まで切りこみを入れる。他方穂木の方は、切れこみをつくる位置は台木と同じ辺でよいが、台木とは反対に、下から上へ斜めに、茎の中央まで切れこみを入れる。この穂木への切れこみを入れる際、最初の本葉が出る側に切れこみを入れれば、最切の本葉は台木の子葉の上に乗る形となり、後で穂木の茎を切ったときも安定がよく、接着部から茎が裂けることもない。



第5図 呼びつぎの切れこみの入れ方と合せ方



第6図 接木がおわりクリップで止めたところ
接木後は普通の苗の移植と同じ扱いでよい

第2表 ビニルトンネル作製後の地温の上り方 (°C)

			2月16日	17日	18日	19日	20日	21日
ビニルトンネル内	平畦	マルチなし	8.5	8.5	9.0	12.5	13.5	12.5
		ビニルマルチ	9.5	10.5	11.5	14.0	14.0	14.0
高畦	平畦	マルチなし	8.5	8.5	9.5	13.5	13.5	12.5
		ビニルマルチ	10.0	10.0	12.0	14.5	15.5	17.0

ビニルトンネルは2月15日の午後つくる。この間露地の地温は1~2.5°C 温度観測は午前9時

切れこみを作ったら、次はその切れこみをかみ合せて、その部分を接木クリップなどで固定しておく。接ぎ終わった苗は、普通の苗の移植と同じように温床に植える。

穂木の茎を切る時期

接木したものは1週間もたてば大体活着する。活着したところで穂木(メロン)の茎を切るのであるが、一度に全部切ってしまうので、5~6本切ってみて、1時間くらい様子を見る。切ったものがしおれないようだったら、残りのものを切るようにする。もししおれるようだったら、もう1~2日おいてから、残りのものを切るのが安全である。

摘 芯

露地メロンは温室メロンのように1株1つとすることは稀で、普通1株3~4本整枝とする。このような場合は、出そうとする子づるの数より2枚くらい多くの葉をつけて、主枝(親づる)をはやめに摘芯する。すなわち3本整枝では、主枝の5葉めの上で摘心し、出てくる側枝(子づる)のうち、勢力の同じものを3本残し、他のものは摘み取ってしまう。

定植後の管理

定植株数は10a当たり500~600株である。株間は75cmくらいとする。

育苗床で移植する場合もそうであるが、移植するときは、今まで植わっていたところより、今度植えられところの地温が、1~2°C高いと活着が早い。

トンネルでは、定植床を積極的に加温するということはむずかしいから、定植の1週間から10日前には畦を作り、マルチをしてトンネルをかけ、できるだけ地温を上げるようにする。

苗の方もこれと平行して、定植床が朝最も地温の低いときに何度くらいになるかみておき、徐々にその低温にならずようにしてゆく。特に夜間の温度を下げてゆく。このようにすれば数日で茎葉はがっちりしてくる。

(以下次号につづく)